

続・英語で読むハリー・ポッターシリーズ

—言葉遊びの日本語訳に見る翻訳の意義とその可能性— (後編)

山田 正人

前編に引き続き、ハリー・ポッターシリーズの魅力および翻訳の意義とその可能性について考察したいと思います。

2. ハリー・ポッターシリーズにおける

多彩な言葉遊び

iii 多義語を用いた言葉遊び

英語は実に「多義語」の多い言語です。また、その「多義性」が「言葉遊び」に非常に効果的に利用されることも事実ですし、ハリー・ポッターシリーズにも多用されています。その最も見事な例は *the Goblet of Fire* 第28章 *The Madness of Mr Crouch* (翻訳テキスト クラウチ氏の狂気) に現れたものでしょう。以下に引用します。

“Maybe she had you bugged,” said Harry. “Bugged?” said Ron blankly “What... put fleas on her or something?” Harry started explaining about hidden microphones and recording equipment.

「もしかして、きみに虫をつけたんじゃないかな」ハリーが言った。「虫をつけた？」ロンがぼかんとした。「なんだい、それ…ハーマイオニーに蚤でもくっつけるのか？」ハリーは「虫」と呼ばれる盗聴マイクや録音装置について説明し始めた。

(文中傍点は原文)

この場面は、リーター・スキーターという辣腕女性記者が書くゴシップ記事に頭を悩ませているハリーたちがスキーターはどうやって自分たちの話を盗み聞きしているのか不思議に思っている場面です。そしてその謎は同巻の最終章である第37章 *The Beginning* (翻訳テキスト 始まり) になってようやく解き明かされます。その部分も次に引用します。

“Bugging” said Hermione happily. “But you said they didn’t work—” “Oh, not electronic bugs,” said Hermione “No, you see...Rita Skeeter”—Hermione’s voice trembled with quiet triumph—“is an unregistered Animagus. She can turn—” Hermione pulled a small glass jar out of her bag. “—into a beetle”

「盗聴器、つまり虫よ」ハーマイオニーがうれしそうに言った。「だけど、きみ、それはできないって言ったじゃない。—」「ああ、機械の虫じゃないのよ。そうじゃなくて、あのね…リーター・スキーターは」ハーマイオニーは静かな勝利の喜びに声を震わせていた—「無登録の『動物もどき』なの。あの女は変身して—」ハーマイオニーはカバンから密封した小さなガラスの広口瓶をとり出した。「—コガネムシになるの」

この謎解きのポイントはbugという英単語が「多義語」であるということです。bugには「虫」という意味と「盗聴器」および「盗聴器を仕掛ける」という意味があるのです。だから、ハリーが言ったbuggedという言葉に対し、ロンが見当はずれな返答をするのです。リーター・スキーターの正体は「コガネムシ」に変身できる「無登録の動物もどき」です。そのことにハーマイオニーが気づき、「見事な謎解き」を披露してくれるのですが、ハリーとロンのこの「トンチンカン」なやり取りの中にこそ、問題解決のヒントがあったのです。

またすでにお気づきのことと思いますが、翻訳テキストからの引用で波線を施した箇所はオリジナルテキストには存在しません。その理由は前項の「Uranusギャグ」での指摘と同様、「オリジナルに忠実」の原則を墨守したのでは、翻訳が不可能であるからです。したがって、オリジナルテキストには存在しない表現をあえて追加してあるのです。

多義語を利用した「言葉遊び」は、登場人物の名前にも見受けられます。ハリリー・ポッターシリーズにおいては、固有名詞が本来有している「意味」がその登場人物の「性格」「素性」「正体」をうまく暗示していて大変興味深いものばかりです。以下にその代表例を挙げてみましょう。

Tom Marvolo Riddle トム・マールヴォロ・リドル

言わずと知れた「ヴォルデモート卿」の本名です。彼の両親については、第6巻(オリジナルテキスト名 *Harry Potter and the Half-Blood Prince* および翻訳テキスト名「ハリリー・ポッターと謎のプリンス」)に詳しいですが、彼が父親と同じ Tom Marvolo Riddle という本名を棄て、Lord Voldemort(「ヴォルデモート卿」と自ら名乗るに至った経緯は *the Chamber of Secrets* に詳述されます。

彼がVoldemortという名前を創作する際に利用した手法は「アナグラム」でした。彼は本名の綴りを一旦、すべてバラバラに解体し、再び“I am Lord Voldemort”という全く異質なものに組み立てなおしたのです。つまり、彼の名であるVoldemortとTom Marvolo Riddleとは「なぞなぞ遊び」(riddle)であるのです。換言すれば、自らの名前にRiddle(「なぞなぞ」)を潜ませた「謎の人物」こそが「名前を呼んではいけないあの人」の正体なのです。

Sirius Black シリウス・ブラック

*the Order of the Phoenix*において非業の死を遂げるハリリーのゴッドファーザー(名づけ親)。彼は第3巻*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*(以下 *the Prisoner of Azkaban*)で初登場します。

彼も「動物もどき」です。彼は「黒い大きな犬」に変身するのですが、そのことは実は彼の名前が如実に物語ってくれています。Blackが「黒」を示すことはすぐに気づけるでしょう。では、「大きな犬」はどこにいるのでしょうか。Siriusです。このSiriusとはCanis Major(「おおいぬ座」)の中で最も明るい星である「シリウス」のことです。しかも、このSiriusの別名がThe Dog Starであるということをご存知の方も大勢いらっしゃるでしょう。

また彼には、Padfootという「アニメーガス」としてのあだ名がありました。このあだ名が犬の足に見られる「肉球」を意識していることも間違いない

でしょう。

Remus Lupin リーマス・ルーピン

ハリリーの父親であるジェイムスとシリウスの共通の親友です。彼は幼いころ「人狼」に噛まれたため、自らも満月の夜には「人狼」へと変身しなければならないという不幸を背負っていますが、彼の名前もまた、その隠された特質を如実に物語っています。翻訳テキストでは「リーマス・ルーピン」と表記される彼の名前を、日本人に馴染みのあるものにするならば「レムス・ルパン」となります。この「レムス」とはローマ建国神話に登場する英雄「ロムルス」(Romulus)の双子の兄弟「レムス」(Remus)のことです。彼ら兄弟は、生まれてすぐに川に捨てられますが、川下に流れ着いた2人を育てたのは1匹の「メス狼」でした。この逸話から、彼が「狼」と深い関係があることがわかります。さらに「ルパン」(Lupin)という日本人にも小説や、アニメなどで非常に馴染み深い名前は、実はフランス語の「オオカミのような」「猛々しい」といった意味を持つ単語なのです。

また彼は、「ムーニー」(Moony)というあだ名も持っています。この語が「月」に関連していることは一目瞭然ですが、それは彼が「人狼」であり、前述のように「満月」の夜にはその醜い姿に変身しなければならない秘密をも示唆しています。しかし、このmoonyという単語には「頭がちょっといかれた」「夢見心地な」という意味があります。つまり、ルーピンは親友の間では「ちょっといかれたヤツ」であったのです。

Dolores Umbridge ドローレス・アンブリッジ

「i 韻律を用いた言葉遊び」でも少し述べましたが、このアンブリッジ教授という登場人物は、*the Order of the Phoenix*、および本拙論においては非常に重要な意味を持っています。

そもそもこのアンブリッジ教授とは、魔法省で「魔法大臣上級次官」という重職にある役人です。ホグワーツと魔法省は*the Goblet of Fire*の結末において、ヴォルデモートの復活をめぐる完全に「決別」してしまいます。人心の混乱をなんとしてでも避けたい魔法省は、彼の復活を断固認めようとしません。それゆえ「ヴォルデモートが復活した事実を広く人

々に知らせるべきだ」と主張するホグワーツは、魔法省にとって「目の上のこぶ」です。そこで魔法省はホグワーツ「解体」を謀り、アンブリッジを「刺客」として送り込むのです。つまり彼女は、それまで架けられていたホグワーツと魔法省との「架け橋」(bridge)を「除去」し(un-), 人々を「不愉快」(umbrage)にします。そして、その事実は彼女のUmbridgeという名前が如実に表現しています。しかも彼女の名前にはもうひとつ重要な秘密が隠されています。それがDoloresです。

彼女は、ホグワーツに「高等尋問官」として就任するや否や、教授陣のみならず生徒たちにもその絶大な権限を行使します。そして、彼女はハリーに、想像を絶するような「あくどい罰則」を与えます。ではその部分をオリジナルテキストおよび翻訳テキストから引用してみましょう。

the Order of the Phoenix

第13章 Detention with Dolores

(翻訳テキスト アンブリッジのあくどい罰則)

Harry placed the point of the quill on the paper and wrote: *I must not tell lies*. He let out a gasp of pain. The words had appeared on the parchment in what appeared to be shining red ink. At the same time, the words had appeared on the back of Harry's right hand, cut into his skin as though traced there by a scalpel—yet even as he stared at the shining cut, the skin healed over again, leaving the place where it had been slightly redder than before but quite smooth.

ハリーは羊皮紙に羽根ペンの先をつけて書いた。「僕は嘘をついてはいけない」。ハリーは痛みでアッと息を呑んだ。赤く光るインキで書かれたような文字が、てらてらと羊皮紙に現れた。同時に、右手の甲に同じ文字が現れた。メスで文字をなぞったかのように皮膚に刻み込まれている。—しかし、光る切り傷を見ているうちに、皮膚は元どおりになった。文字の部分に微かに赤みがあったが、皮膚は滑らかだった。

上記の罰則はアンブリッジ教授の部屋で、しかも彼女の監視下で実施されます。この罰則は通常「軽度」な罰則なのですが、この場合は少し違いました。

アンブリッジの「罰則」は特殊なペンを用い、自らの「血と肉」を「インクと紙」に代えるというものであったのです。そしてこの罰則はハリーの右手の甲に「私は嘘をついてはいけない」という「血の言葉」が十分に「滲み込むまで」続けられるのです。しかも、その傷はすぐに治ってしまい「滲み込む」には相当な時間が必要です。結局、彼はこの「ドローレスとの苦痛を伴う罰則」を4日連続で続けることになるのです。

原作者の外国語に関する豊富な知識にはいつも感心させられます。なぜならこのDoloresという名前は本来スペイン語の「精神的苦痛」「肉体的痛み」「悲しみ」「嘆き」という意味を持つdolorの複数形が人名になったものであるからです。

これで、筆者がこの章のタイトルである“Detention with Dolores”の日本語訳は「ドローレスとの罰則」にすべきであると主張した理由をご理解いただけるでしょう。原作者は、Doloresという人名を用いることにより「ドローレスとの罰則」と「苦痛を伴う罰則」というダブルミーニングを用いた「言葉遊び」を施し、この章におけるハリーの「苦悩」を見事に表現していたのです。ハリーは顔を見るのも忌まわしい「ドローレス」から課された「精神のおよび肉体的苦痛を伴う罰則」を必死に耐えています。その内容を、この“Detention with Dolores”というタイトルは表現しているのです。

このタイトルは、「頭韻」を踏んだ言葉遊びにもなっています。そのことを踏まえば、たしかに「アンブリッジのあくどい罰則」は見事な「創作」でしょう。しかし「頭韻」を踏んだ章タイトルはこの章のほかにも多数見られますが、それらが必ずしも、翻訳テキストで「頭韻」を踏んだ訳が施されているわけではありません。その理由は、「日本語への翻訳では、頭韻を踏むことが常に可能であるわけではない」からです。それならばこの章のタイトルに関しても、わざわざ翻訳者による「創作」をそのタイトルとせずともよかったという結論も導けるはずです。

このあたりに「翻訳という作業」の根本的問題があるようです。では次項では、そのことを中心とした考察を行い、拙論の総まとめとしたいと思います。

3. 翻訳の定義およびその意義と可能性

まず「翻訳とは何か」という定義を確認しておきましょう。これについては西江雅之氏の『「ことば」の課外授業』(洋泉社)(以下「課外授業」)から引用させていただきます。

翻訳というのは、ある言語で表現されたことを、意味の上でも形の上でも原文に近い形を保ちながら、他の言語に置き換えることです。その置き換えは、制約の中での一種の「演奏」なんです。つまり、本来の文章をいかに訳すかは、翻訳者の腕によるわけです。

見事な定義です。特に「演奏」という表現は絶妙です。しかしこの西江氏の定義には決して看過できない重要事項が秘められています。それは、この定義の裏を返せば「翻訳とはいかなるオリジナル作品であろうとも、その『演奏』いかんによってはオリジナルをはるかに凌駕する『名作』にも、また似ても似つかぬ『駄作』にもなりうる」ということです。換言すれば「翻訳」とはオリジナルに「近い形」を保っているとはいえ、オリジナルとは似て非なる「別作品」であるのです。直裁的に述べれば「J.K. Rowling氏が「創作」した*Harry Potter and the Philosopher's Stone*以下6作品(2006年6月現在)と松岡佑子氏が「翻訳」した『ハリー・ポッターと賢者の石』以下6作品(2006年6月現在)は、別物であることは動かしがたい事実なのです。つまりハリー・ポッターシリーズを「翻訳テキスト」で読んで感動したとしても、それはあくまでも「松岡佑子氏の作品」に感動したのであり、「J.K. Rowling氏の作品」に感動したとは、残念ながら言えないのです。

「オリジナルテキスト」と「翻訳テキスト」が別作品である以上、それらのテキスト間に見られる相違はすべて許容されることとなります。それゆえに、「はじめに」の項で述べた「オリジナルの持ち味は犠牲にならざるを得ない」という結論に我々は到達せざるを得ないのです。

ハリー・ポッターシリーズに施された本来の「言葉遊び」をはじめ、様々な「仕掛け」に感動したいのであれば、やはり「オリジナルテキスト」を鑑賞するしかないのです。

では「翻訳」とは「必要悪」であり「翻訳」の「意

義」や「可能性」など存在しないのでしょうか。

そんなことはありません。むしろ全く逆です。そのことについても西江氏の「課外授業」および齊藤兆史、野崎欽両氏の対談集である『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』(東京大学出版会)での3氏の主張をもとに述べたいと思います。

西江氏は、いわゆる「グローバル化」が進み、世界中の出来事が毎朝配達される新聞に記事として載っている以上、もし翻訳が存在しないならば、世の中にあるすべての朝刊は「三十言語が乱れ飛ぶ」様相を呈すこととなってしまうと主張しています。換言すれば、何語に限らず、新聞が新聞として、その機能が果たせるのはひとえに「翻訳が存在するから」なのだと言っているのです。

また、齊藤兆史、野崎欽両氏の主張は、「二葉亭四迷、堀口大學、西脇順三郎などによって行われた翻訳、翻案が近現代日本文学を培い、特にオリジナルをはるかに凌駕する堀口大學のフランス語詩の翻訳は、その美しさにおいて日本語が持つ可能性をおおいに高めた」という内容です。日本文学および日本語は優れた翻訳家の存在を以って一段と豊かなものになったということです。したがって両氏の主張をまとめるならば、それら先駆者の翻訳は立派な「日本文学作品」であるということになります。

以上の3氏の主張を一般的な次元に敷衍するならば、「翻訳は人間が行う文化的活動には無くてはならないものであり、文学ならびに言語、ひいては文化全般をより豊かなものとする、おおいなる可能性を秘めている」ということとなります。

4. 翻訳者の使命

ミステリー作家である京極夏彦氏のいわゆる「妖怪シリーズ」の中に『絡新婦の理』という作品があります。その作品中で京極氏は主人公である古本屋「京極堂」の主人こと「中禅寺秋彦」に以下の台詞を述べさせています。

きみは悪魔悪魔と云うが、それは悪魔なのか？悪魔なのか？それとも悪鬼か？冥王かな？それらは皆違うものだ。起源が違う役割が違う属性が違う。尤も現在では完全に混同されてしまっているがね。(中略)混乱の元は言葉だ。訳すことが多くの似たものを統合し、また小さな差異を拡大した。事実和訳はど

れも悪魔とされ、類似は同一となった。(後略)(文中のルビ、傍点は原文)

これは悪魔を信仰するある少女に対し、陰陽師でもある中禅寺秋彦が発する台詞ですが、下線を施した部分は「翻訳」を考える上で非常に示唆的であると思います。なぜなら、極言が許されるならば「翻訳上の誤りが悪魔信仰、さらには犯罪を引き起こした」とも言えるからです。

この『^{じやうふうごもことわり}絡新婦の理』という作品はフィクションであり、作品中の登場人物および犯罪は実在しません。しかし、昨今世情を騒がす「カルト宗教」が関係する犯罪を鑑みるに、京極氏が作品中で展開して見せた事件がノンフィクションになる可能性も決して否定できません。

「翻訳」は、人間の文化活動には必要不可欠なものです。そして「翻訳の恩恵」を受け、言語や文学は豊かなものになることもまた事実です。しかし上記の例のように、それと気づかれない「誤訳」がとんでもない「誤謬」を招く場合もあるのです。その場合、翻訳が与えるものは「恩恵」ではなく「害悪」であると述べるべきでしょう。

すばらしい翻訳は文学や言語を、より豊かなものへと導く作業です。しかし、それは「正確で美しい翻訳」であることが絶対条件であるのです。翻訳者の知識不足等による誤訳や不適切な翻訳は、将来、長きにわたりその文化に禍根を残すことになりかねないのです。

5. おわりに

世界中の言語が「ただひとつ」にならない限り、「翻訳」は存在し続けます。また翻訳があるからこそ、それぞれの言語の可能性も広がります。しかし「翻訳作業」は現在のところ、「翻訳能力」とも呼ぶべき特別な「能力」を有した「翻訳家」にゆだねるしかありません。

今後とも松岡佑子氏をはじめ、優秀な翻訳家の皆さんの一層のご研鑽とご活躍を期待します。

引用文献

- Rowling, J.K. *Harry Potter and the Goblet of Fire* Bloomsbury 2000
 Rowling, J.K. *Harry Potter and the Order of*

the Phoenix Bloomsbury 2003

- Rowling, J.K. 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』上・下巻 静山社 2002
 Rowling, J.K. 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』上・下巻 静山社 2004
 西江雅之『「ことば」の課外授業』洋泉社
 斉藤兆史 野崎敏『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』東京大学出版会 2004
 京極夏彦^{じやうふうごもことわり}『絡新婦の理』講談社文庫 2002

参考文献

- Rowling, J.K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone* Bloomsbury 1997
 Rowling, J.K. *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* Bloomsbury 1999
 Rowling, J.K. *Harry Potter and the Half-blood Prince* Bloomsbury 2005
 Rowling, J.K. 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社 1997
 Rowling, J.K. 松岡佑子訳『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』静山社 2001
 Rowling, J.K. 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと謎のプリンス』静山社 2006
 I・モンタネリ 藤沢道郎訳『ローマの歴史』中公文庫 1979
 鴻巣友季子 『明治大正翻訳ワンダーランド』新潮新書 2005
 長島要一『森 鷗外 文化の翻訳者』岩波新書 2005
 鈴木範久『聖書の日本語 翻訳の歴史』岩波書店 2006
 編集主幹 小西友七 編集委員 八村伸一 南出康世 原川博善『ジーニアス英和辞典』SECOND EDITION 大修館書店 1997

(学校法人中部大学 春日丘高等学校教諭)